

国立歴史民俗博物館の愉悦①

えほんむしえらみ
喜多川歌麿画 『画本虫撰』

天明8年（1788）



絵師として成功を収める要素は何だろうか。物の形態を的確に再現できるデッサン力、たくみな空間の構成力、豊かな色彩感覚などが想起されるが、鋭敏な観察眼もまた重要な要素のひとつであろう。星の数ほどいた江戸時代の浮世絵師の中で、喜多川歌麿

（一七五三？～一八〇六）は間違いなく傑出した観察眼の持ち主であつたといえる。

歌麿は、美しく官能的な女性の絵姿を数多く描き出して一世を風靡したことで知られるが、彼が美人画の分野で高い人気を得たのは寛政三年（一七九二）頃以降である。それ以前、天明（一七八一～八九）後期から寛政初頭にかけは、狂歌絵本の挿絵を数多く描き、この分野で注目される絵師であつた。

狂歌絵本とは狂歌のグループが詠んだ狂歌集に浮世絵師らによる挿絵を添えたもので、美麗な多色刷りによる豪華な仕立てのものも少なくない。特定のテーマを設定して編まれたものが多く、『画本虫撰』は、文字通り「虫」をお題に詠んだ狂歌が集められており、歌麿による挿絵も昆虫を中心にトカゲやカエル、カタツムリなどの小動物を季節の草花とともに描き出している。海辺の貝を詠んだ『潮干のつと』（寛政元年）、鳥をテーマにした『百千鳥狂歌合』（刊年不詳）とともに、三部作（いずれも宿屋飯盛撰、葛屋重三郎刊）とされているもので、いずれも生き物の精緻で写実的な描写がこの当時のものとしては傑出している。

『画本虫撰』は、全部で一五図からなり、掲出図はタケノコとバラの花にケラ、ハサミムシを描き添えたもの。ケラの描写は図鑑並みの細かさで、ハサミムシは尾端のハサミを振り上げた姿態がよくその生態をとらえている。本書には、歌麿の絵の師匠である鳥山石燕が序文を寄せており、歌麿が幼少のころにトンボを糸でつなぎ、バツヤやコオロギを掌に載せて遊ぶことに余念がなかつたことが書かれている。子どもの虫好きは別に珍しくもないが、歌麿は物事を細かにとらえていたとも記されている。

彼が生来持ち合わせていたきめ細かい観察力は、やがて生身の女性に向けられることになる。指先のしぐさやわずかな身のこなしで匂いたつような女性らしさを表現し、目の表情で女性の内面の心理まで描き出すという、他の追隨を許さぬ、歌麿ならではの画境を開いたのである。